

もっと知ろう “陶”

4、戦争と平和

間もなく 72 回目の終戦記念日を迎えます。日本は先の戦争から戦争の愚かさ、悲惨さ、むごさを学び「二度と過ちを繰り返しません。」と誓いました。平和の対局「戦争」の話し、戦時中の陶がどんなんであったかを少しばかり。



防空監視員

猿爪の本町「新星」さんの前の坂を登りきり、右に曲がると秋葉神社がありますが、その辺りに防空監視哨（ぼうくうかんししょう）がありました。

陶の監視哨には二人の軍人が永楽屋さんに宿泊して勤務していて、二人は交代でやぐらの上から目視で敵機を見張り、発見すれば、「〇〇方向へ向かっている敵機発見！」と名古屋にいる司令官に報告するのが任務でした。

72 年前とはいえ、米軍がレーダー飛行するのに対し、日本軍は多くを目視に頼っていたのです。「これでは米軍に勝てるわけがない。」と、あきらめ顔の人がいても不思議ではありません。最も、監視哨が大いに役目を発揮し、それが米軍の知るところとなれば陶に爆弾を落とされたかもしれません。

また、戦時中はトンネル窯の燃料である重油が不足すると、重油窯を薪ガス窯や亜炭ガス窯に改造するとともに、廃油まで使用したそうです。また、鉄鋼資源が葛藤し始めると、陶磁器による金属製品の代用品生産が本格化し、水閘管、仏具・火鉢・洗面器、更になんと手榴弾まで製造したそうです。更に海綿鉄（多孔質の鉄塊、スポンジ鉄とも呼ばれた）の生産も行った。しかしながら、働き盛りの男手は軍隊にとられ、町に残るのは老人と女のみのため、岩村女学校やら陶・明智の高等科からも動員を受けて（70 名ほど、最大時は 200 名ほど）生産に励んだといいます。

これらの事もさることながら、陶町出身者も戦場で多くの戦争犠牲者を出したことも忘れてはいけません。現在の陶児童館北の丘陵には、戦争での戦没者を慰霊する忠魂碑があり、その隣に 117 基の墓標が並んでいます。平成 8 年には戦後 50 年を記念して陶町の長寿者によって、戦没者の犠牲のうえにある今の平和に感謝し「みたまよ やすらかに」と記した立派な平和観音（右の写真）が奉納されました。

